吉田寮の'人'間関係
ーとある留学生の視点からー

吉田寮の人間関係はどういった関係であるのか。正直、私にはよくわからない。

友達関係であるかではないか、家族関係であるかではないか、なんというか、いかにも現代日本（多分だけではない、他の国）においてかなり変わった、異なった、特徴のある「人間関係」であると思う。ある意味で、今頃外の社会に珍しく、素直な、近親感のある魅力的な「人間関係」があると思う。
ただ思いついた点だけ、並んでおこう。

相部屋であること

吉田寮の居室は基本的に相部屋である。きっと寮の誰かが、自分の相部屋になること。
一つ言っておこう。確かに相部屋は吉田寮の人間関係の形成にかなりの役割を果たしていることを否認しないが、ただ、吉田寮の人間関係はこれだけではない。
どんな人と相部屋になるのか、入寮して一年目はあまり選べないが、二年目以降若干選べるようになる。
寮生には大体男子学生は多いが、近頃女性も増えてきた。でも女性の大半はおそらく留学生である。留学生は既に４分の1か3分の1程度に増えてきた。全体的に学部生が多いが、院生も多い、研究生や聴講生などもいる。家族、子供連れの人もいるし、珍しいが猫を連れてきた人もいる。しかし、やはり家族やペットを連れてくる人と相部屋になれるかどうかまだ相談の必要がある。

私は色んな人と相部屋になった経験がある。でも、部屋の使い方によって、また相部屋との関係が変わってくる。
例えば、二人一部屋の時があった。でも、ちょっと難しい感じがする。なぜなら、二人の寝起きとも同じ部屋だから、生活リズムが合わないときに矛盾が生じる。そのときに、二人でゆっくり相談して何とか解決したが、やはり互いに我慢せざるを得ないところが多かった。
例えば、四人で二部屋を使う時もあった。一部屋をリービング兼勉強部屋に、もう一部屋は寝部屋にした。これはかなり人間関係がうまく行った使い方であった。時々さらに回りの人を呼び、十数人もただ８畳の間に入り込み鍋を囲んだりしていた。
少ないが、吉田寮には10人以上の寮生で4、５部屋に住むという事例がある。大体男性同士だったら、実現しやすいようなスタイルである。これはまだ楽しいことで、その共同のリービングである部屋はまるで一種の「公共圏」のようで、部屋の住人だけではなく、寮生でも寮生の友達でも、様々な人の集まり場となりつつある。時には会議の場でもある。
一人では淋しいと思うが、相部屋では多少プライベートの面では欠けているかもしれない。
でも、社会に入っても一人じゃ生きていけない、寮に居る間はちょうど家族以外の人と生活し、外国人と生活するといういい練習の機会ではないか。

ま～人間は常に矛盾の中に生きる動物だから、仕方があるまい。

吉田寮に人の呼び方

どうも、日本語では「名字＋さん」という習慣的な呼び方があるようだ。これは所謂一般的であるのだろうか。

でも吉田寮には、こういう定式はない。が、明らかに「さん」をきちんと付ける人、適度に付ける人、とある特定人物にしか付けない人、ほとんど使わない人、という大きく数類に分けることができるようだ。

まことに奇妙なことで、同じ人に対しても、異なる場面で「さん」の使い方が異なるようである。例えば、明らかに先輩で年も上の人によく「さん」が使われている。しかし、麻雀をやっている人はときとき明らかに自分より年も下である後輩にも使う。これは、私の観察により、多分麻雀をやってほしいのか、それとももしかして、まけてしまったのかのいずれかが原因であるかもしれない。なぜか、私がそのような複雑なことをうまく説明することができない。

到底、私のような外国人にとっては、日本語は外国語である以上、自ら正しいかどうかを判断できるような外国語のレベルもまだ到達できていなければ、自ら新たな言語を創出するようなまねもしたくない。

外国人である私にとっては、呼び方の微妙な違いから人間関係の微妙な違いを探れることはまだできてないって、多少その気がする。どうも、探れることは伝説の日本語の「最高峰」となるかもしれない。

では、留学生の皆さん、目指せーのだ！

吉田寮の上下関係

ということで、単に呼び方からでは、日本において有名は「上下」関係、先輩後輩関係を探ることが難しいという私には、微かであるが、どうも吉田寮にも所謂「上下」関係が存在するかもしれない。

なんていうのか、私は研究室やら、バイト先やらの「上下」関係にとても悩ませれている。なんていうのか、理不尽、本当に理不尽だ。外の世界で様々を経験したうえで、帰って吉田寮のことを考えると、また奇妙な感じがする。

吉田寮には自治会がある。委員長にあたる者も、各専門部や局にも部長や局長がある。どうも、「管理的」であるか、「リーダー的」であるかのような感じがする。実際に現在の吉田寮では、部長や局長達が会議を招集、事項報告、日常業務の履行、何から何まで行っている。うまく行っている部局は衆智を上手に引き出しているが、少数である。大半の部局長はいつも最も仕事を頑張っている人物である。それもまた結構頑張っている人が少なくない。これは、つまり毛沢東がいうような「人民のために！」って感じ？なんというのか、すばらしい。

確かに、「自治」の実行では、（アソシエーション？組織？における）各個々人とも自らの自己管理機能を発揮しつつ上で、ネットワークを形成する過程があるが、個々人の間の動きをうまく合わせ、独立した個々人を連携し、上手に調節する必要となる役割を果たす「人」或は「要素」が必要だ。徹底的な、個々人の「自治」も必要だが、「組織」全体を集約する役割を果たす「部局長」の皆さんも不可欠だろうか。

つまり、吉田寮の「上」は独立した個々人＝寮生の皆さん、「下」はその連携する役割を果たす個々人＝各部局長の皆さんということになるのだろうか。

結局、吉田寮の上下関係について、如何に評価すればよいのか、私にはよくわからない、むしろ読む人、吉田寮に住む人自分で感じてもらった方がいいだろう。

吉田寮の人間と猫の関係、猫と猫の関係

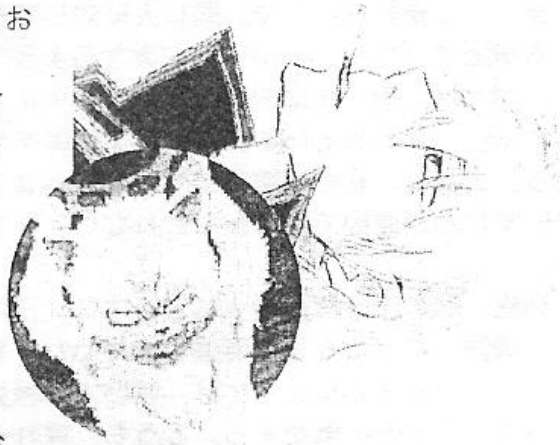
なぜなら、吉田寮の猫は吉田寮の一部である。そして、そのなかの何匹の猫が、寮生の誰よりも遥かに長い間寮にいるからである。さらに、猫を通じて、寮生と寮生の相互関係が発生し、変化している。

吉田寮の人間関係を語るには「猫」という要素をなくしてはならない。

200近くの人間がいる吉田寮だから、愛猫家、悪猫家、どうでもいい家、などなど様々。

猫でも寮の飼い猫と野良猫の両派がある。飼い猫、野良猫を含めた猫社会には、既に複雑な社会構造が築かれている。多分、ねこ社会の始まりは私たちが入寮した時より遥か昔のことだと思う。

よくあることだが、猫好きな寮生は自分の部屋の前に猫に餌をやる小皿を置いてあったりする。毎日欠かさず餌や水を入れておく人もいれば、気まぐれで不定期にやったりする人もいる。



すると、これはまた奇妙なこととなる。猫は当然餌を求めてやってくる。同時に、猫好きな人も猫を見たり、撫でたりしてくる。猫でも一匹が来たり、数匹が来たり、時にはわずかの餌の為に、挑発的な猫声を上がったりしている。時には喧嘩することもある。

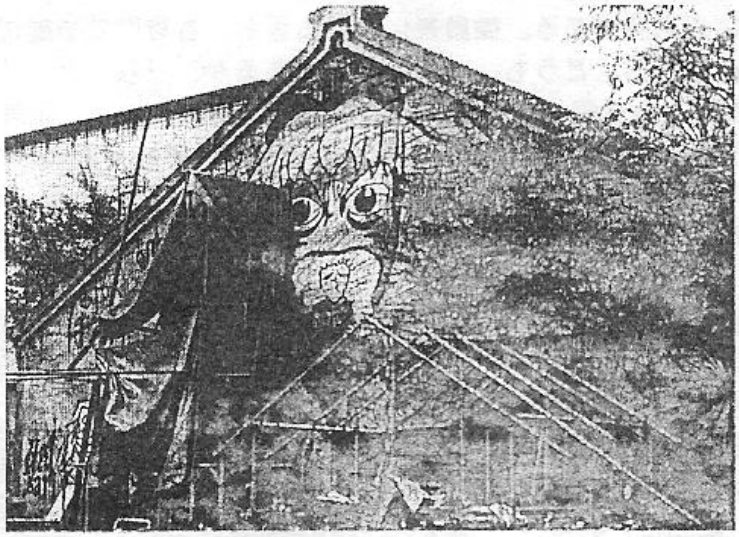
人だと、二人が居れば、猫に関する会話が楽しくできる。話さなくても、猫を巡ってお互いに目線を交わすことがしばしばである。普段よく会えない人、よく喋らない人でもこのときに、なんと暖かい合図を送ることがある。全く猫のお陰だ。

さらに、猫のよく集まる所にも人がよく集まる。もしかして、その逆、人がよく集まるところに猫も集まるかもしれない。まぁ～どっちもある。

話し合いの原則によって築かれた人々の関係

これは最も大事なことである。「話し合いの原則」簡単に言えば、とりあえず皆さん話し合って、相談して解決しようという素直な考えである。でも、これは現在吉田寮に置いて、あらゆる「関係」の基礎となる。

ちょっと難しいだが、話の上手な人、話の上手ではない人、話やすい人、話ずらい人って様々だとおもう。それと、当然猫なんか交流難しいだろうか。でも、所謂「話し合い」の中でも、とりあえず話してみる、話そうと思うことも大事かもしれない。さらに、単に「話す」ことだけではない。姿勢、目線、口調、タイミングなども重要である。



私はそう思う。猫にだって、自分の真意がちゃんど伝えられると思う。

最後に欲望かもしれないが、「話会い」いう大事なことなのに、現在社会にはだんだん忘れられている。いつか、吉田寮によって、社会的に再喚起することでもできたらと思う。